

研究課題	『理趣経』 広本のチベット訳および 漢訳対照の和訳研究を中心とした文献学的研究
研究代表者	大塚 恵 俊 (仏教研究科博士後期課程仏教学専攻)

① 研究の目的

真言宗所依の読誦經典に位置づけられる『理趣経』には、略本から広本に至るまで多くの類本が存在し、特に略本に相当する不空訳「般若理趣経」を中心として多くの研究成果が報告されている。また近年では、苦米地等流氏によって略本に相当する新出梵文写本の校訂本が出版され、略本に関する研究はさらなる進展が見込まれる。

一方、広本に関する研究は、福田亮成氏による精緻な研究成果が報告されているものの、その後の広本を扱った総合的な研究成果は報告されておらず、略本の研究ほどの進展は見られないのが現状である。

そこで本研究では、『理趣経』 広本、すなわち『理趣広経』を取り上げることにし、『理趣経』類本全体の研究発展の一助となることを目標に設定した。また『理趣広経』には略本の内容も包摂されていることから、苦米地校訂本を用いることで、梵本を通じた視点から略本の研究成果に対する再検討を行うこともできる。従来の略本の研究は、多くの問題を有する Leumann 本を始めとし、チベット訳や漢訳に基づく再編成を余儀なくされていたが、資料的価値の高い苦米地本を対照させることで、略本の研究に対しても新たな視座を提示できると思われる。さらに『理趣広経』には、略本に説かれていないマンダラや密教儀礼に関する儀軌が付加されている。近年のマンダラや密教儀礼に関する研究はめざましい進展が認められ、最新の研究成果をふまえた上で、未だ明らかにされていない『理趣広経』所説のマンダラや密教儀礼を取り上げることは、密教文献研究全体にわたる有意義な成果を期待することができる。特に『初会金剛頂経』との関係は重要であり、近年の研究では『初会金剛頂経』と『理趣経』の先後関係について、『理趣経』の成立が先行していたとする新たな見解も提示されている。

したがって『理趣広経』の研究は、略本の研究成果の再検討ができるだけでなく、多くの課題が残されている『理趣経』類本所説の密教儀礼に関する研究に対

しても、多大なる貢献が可能であり、『理趣広経』は有意義な研究成果を期待することのできる密教文献であると考えられる。

② 研究の経過

近年の先行研究によって、『理趣広経』及びその関連経軌所説のマンダラの研究が詳細になされており、現行のチベット訳『理趣広経』(Śrīparamādya, 以下 ŚP) について、段階的に成立して本来別行していた三編の経軌が後代に一つの大部の經典として編纂された、という経緯が明らかにされている(ŚPの構成は下記の表を参照されたい)。

章末に付される名称	チベット大蔵経所収名	略称	法賢訳	『理趣経』略本との対応
大楽金剛 不空三昧耶	Śrīparamādya-nāma-mahāyānakalparāja	「般若分」	対応	『理趣経』略本を包摂
大楽金剛 秘密	Śrīparamādya-mantrakalpakaṅḍa-nāma	「真言分」		百字偈
吉祥最勝 本初			対応	二十五種 般若咒

この三部構成の ŚP の中でも、しばしば後代の密教文献の中で引用されるのが、三編の中で最も成立が遅いとされる「吉祥最勝本初」であり、教理および儀礼の実践の両側面において、インド後期密教への発展過程の足跡を見ることができる。このような事情から、従来では、インド後期密教への架け橋としての内容を有する「吉祥最勝本初」を中心とした視点から ŚP 全体を一律に扱う傾向があったように思われる。すなわち、ŚP には、成立年代にある一定の隔たりを有する新層と古層が存在するにも関わらず、主として新層を通じた視点から ŚP 全体を扱う場合が少なくなかったように思われる。

そこで本研究では、上記のような近年の研究成果を前提とし、本経のチベット語訳校訂テキストの作成および翻訳研究を行うにあたり、ŚP の中で最も成立が早いとされる「般若分」を取り上げることにした。そして、ŚP の古層部分がいかなる特徴を有し、インド

密教經典の発展過程においてどのような位置づけができるかを検討する作業を第一の研究課題に据えた。このような考察を通じて、「般若分」初段所説の密教儀礼の特徴を明らかにし、ŚP の古層部分である「般若分」に対して、密教儀礼の視座から位置づけをするための第一歩としたい。

なお、『理趣広経』には残念ながら梵文原典は見出されていないことから、現存するチベット語訳を基本資料とし、宋代の法賢による漢訳を対照させた翻訳研究を進めている。翻訳研究を行うにあたり、使用している基本資料は以下の通りである。

<チベット語訳>

Śrīparamādya-nāma-mahāyānakalparājā

(『吉祥最勝本初と称する大乘の儀軌王』)

Rin chen bzang po・Śraddhākaravarman 訳

Derge ed. no.487 (Taipei ed. no.485) ;

Peking ed. no.119 ; Cone ed. no.122 ;

Narthan ed. no.437 ; Lhasa ed. no.453 ;

Toyo Bunko Manuscript Kanjur (河口写本)

no.441 (1)

<漢訳>

『最上根本大樂金剛不空三昧大教王経』

法賢訳 大正 no.244

<注釈>

Śrīparamādya-ṭīkā (『吉祥最勝本初広釈』)

Ānandagarbha 著作

Rin chen bzang po・Śraddhākaravarman 訳

上記に示すチベット語訳諸版を対校させて、本経のチベット語訳校訂テキストを作成しており、現在は第3章の校訂作業ならびに翻訳研究に取り組んでいる。

③ 研究の成果

「般若分」の核心部である初段所説の密教儀礼を概観すると、儀軌として詳細に規定する記述が乏しく、組織的に整理がなされていないという点を指摘できる。また初期密教經典に位置づけられる『蘇婆呼童子請問経』との共通する āveśa 儀礼の要素を確認できた。さらに「般若分」初段所説の āveśa 儀礼の主眼は、インド中期密教以降において重要な意義を有する本尊瑜伽の成就法ではなく、あくまで三世に関わる教示を受けることであった。したがって、このような āveśa 儀礼は、金剛薩埵を始めとする諸尊との瑜伽と結びつけられて説かれている『初会金剛頂経』程の密教儀礼上の意義や発展的な段階を有してはいないといえる。

このような考察結果を勘案すると、初段に代表される「般若分」所説の密教儀礼は、インド密教隆盛期の比較的早い段階で成立していた可能性をはらんでいることを指摘できるだろう。同様の可能性の指摘は、いくつかの先行研究においても、主として不空撰述の性格が強いとされる『理趣釈』との関係を通じてなされており、前述したように、「般若分」初段所説の密教儀礼の視点からも同様の可能性を指摘できることは大変興味深いことである。

[本研究会の研究成果の一端を平成23年度の第40回豊山教学大会において報告し、その詳細を「豊山教学大会紀要第40号」に掲載予定である]

④ 研究の課題と発展

今後の研究課題は、「般若分」所説の密教儀礼全体を詳細に精査し、核心部となる初段の考察を通じて生じた可能性、すなわち「般若分」所説の儀軌の成立が比較的早い年代まで遡れる可能性について、さらなる検証と考察を深めていきたいと考える。密教經典において、教理を説く部分と儀軌を説く部分は互いに連関していることから、「般若分」所説の密教儀礼を考察していくことは、「般若分」所説の教理の研究に対する新しい視座も提示することにつながるであろう。

本研究がこの段階に到達することができたならば、『理趣経』類本全体の展開過程を概観することができ、先行研究において議論されている『金剛頂経』と『理趣経』の先後関係について、革新的な進展を見込むことができると考える。

[参考文献]

Sarvatathāgatattvasaṃgrahamahāyānābhisamāyanāmatantra. (堀内寛仁『梵蔵漢対照初会金剛頂経の研究梵本校訂篇』(上)(下), 密教文化研究所, 1983(上)1974(下))

Subāhupariprcchānāmatantra (Derge ed. no.805 ; Peking ed. no.428)

福田亮成『理趣経の研究 その成立と展開』国書刊行会, 1987

田中公明『インドにおける曼荼羅の成立と展開』春秋社, 2010